
妖酒の怪

Titania

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖酒の怪

【Nコード】

N3940BA

【作者名】

T i t a n i a

【あらすじ】

学会での発表のために来日した、イギリス人の文学研究者フランク。

今回もいつもと変わらぬ来日のはずであったが、宴席で勧められた酒を口にしたことがきっかけで・・・。

ここは一体、どこであろうか。フランク・オーウェンは、ただ辺りを見回すばかりであつた。まるで夢の中にいるような、それでいて酷く覚醒しているような、奇妙な心地である。

すぐ目の前に、所々に松の木を生やした岩山がそそり立つのが見えた。その雲に覆われた頂からは、一筋の清流が滝となつて流れ落ちてゐる。麓へ落ちた滝は小さな虹を成しながら、冷たい飛沫となつて辺りに涼を漂わせてゐる。滝の足元には鏡のような澄んだ水を湛えて小さな泉が広がり、その周囲には柔らかい青草が生え、七色の羽をした蝶が二匹、睦み合おうとするかの如くに飛び交つてゐる。

不思議なことにフランクは、この清しい水辺に、どこをどう辿つて来たのか、皆目見当がつかぬのであつた。どこかで見たことのある光景のような気もするし、そうでないような気もする。随分長い道程を来たような気もするが、一瞬でここへ来たような気もする。酷く頭が混乱して、フランクはその場に座り込んだ。と、ふとその彼の目に、思いもかけず人影が見えた。

人影は、水辺にある彩都風の四阿の中にあつた。黒く輝く瓦屋根の下、朱塗りの支柱の影に、その姿が垣間見える。身分の高い人なのであるつか、彼は薄絹の衣を纏つてゐた。彼は腰まで届こうかという艶やかな黒髪を緩く束ね、手には書を携えて優雅に腰掛けてゐる。書生風の若者のようであつたが、後ろを向いてゐるため、その面はまるで見えない。

ここは一体、何処なのですか。フランクは立ち上がつて若者のほうへ歩み寄り、尋ねようとした。だが彼の足がそちらへ向くより早く、気配を察したのか、若者がふと立ち上がった。彼はこちらへ、面を向けようとする。フランクは何故か、胸が高鳴り、心臓が早鐘を打つのを感じた。若者がこちらを見た瞬間、フランクは再び、そ

の場にくずおれた。

「こちらが、先生と奥様のお部屋ですよ。お時間まで、ごゆっくりお寛ぎ下さい」

てきぱきと荷物を片付けながら、フランクの助手兼案内人の少年、ミツヒコは言った。

「ありがとうございます、ミツヒコ。あとは私たちで何とかするわ。あなたも疲れたでしょう、自分の部屋でゆっくりしていなさいな。それから、これを」

「ありがとうございます、奥様。では遠慮なく頂きます」

フランクの妻マリアンが差し出す菓子を手にして、ミツヒコは屈託無く笑った。彩都にならどこにでもいる感じの、切れ長の黒い目をした明るい少年である。歳の頃は十五、六といったところだろうか。目端が利いて陽気な彼は、フランクも重宝していたし、マリアンも可愛がっていた。

「それじゃあ先生、発表は三時からですからね。忘れないで下さいよ。遅れたらまたクルズ教授がうるさい・・・」

「ああ、わかっているよ、ミツヒコ」

フランクはトランクの中から書類を取り出しながら、笑ってミツヒコを遮った。

「今回の学会発表は、私にとっても大きなチャンスだ。何しろ日本文学の権威が集まる、大切な学会だからな。十日程の短い滞在だが、ロンドンの大学に帰った暁には、同僚たちをぎゃふんと言わせてやりたいものだよ」

「その意気ですよ、先生。では、また後ほど」

ミツヒコは微笑み、部屋を出た。彼が去ると、マリアンが口を開いた。

「あの子、なかなかいい子ね。彩都のお知り合いが連れてきた子

なんですって？いつからともなくあなたの研究を手伝っているようだけど。・・・それにしても一体、あの子はどういう子なのかしら。彩都の出身ってことはわかってるけど、家族の話も聞かないし」

「お兄さんがいるとか、言っていたよ」

フランクは相変わらず書類を整理しながら答えた。

「でもそんなこと、どうだっていいじゃないか。あいつが話したくなれば、そのうち詳しく話すこともあるさ。それよりあいつは、なかなか賢くて役に立ってくれるよ。もし近い将来、本人がうちの大学に入りたいというなら、推薦文を書いてやってもいいと思うてるけど」

「そうねえ、それはいいことね。・・・それにしてもここ、いいお部屋じゃない。窓から彩都の街が見下ろせるし、障子の和紙も、淡く模様が入って素敵じゃないの。あなたの研究旅行に何度かお付き合いつてきたけど、今回の宿は一番上等じゃなくて？畳も綺麗だし、それに、あら、これは・・・」

「どうした、マリアン？」

フランクはふと書類を繰る手を止め、立ち上がってマリアンに近づいた。

「あなた、ほら、この掛け軸の絵」

彼女は指差した。

「これ？何てことない絵じゃないか。これが一体、どうしたというのだ？」

「いえ、どうもしませんけど。ただ、何となく・・・」

マリアンは不安げに、細い顎に手を当てた。

「何となく、何だ？」

立ち上がり、自分の肩に腕を回す夫の顔を見上げながら、彼女は溜息を吐いた。

「いえ、何もないんですけど、何となく気味の悪い絵じゃありませんこと？」

「これが？」

フランクはまじまじと、その掛け軸を見た。それは特にどういふこともない、日本にはどこにでもあるような、ありふれた山水画だった。

「ただの山水画じゃないか。どうってことないよ。それより、書類の整理を手伝ってくれよ。三時まであと二時間しかないんだから」マリアンは肩を竦め、トランクのほうへ戻った夫に続いた。それきり彼女は書類や資料の整理に没頭し、山水画のことはすっかり忘れてしまった。

2 .

「素晴らしい発表だったよ、フランク」

発表終了後の懇親会を兼ねた夕食の席で、フランクの恩師であるクルズ教授は終始御機嫌であった。

「君がまだ学生の時分、彩都の民間伝承を研究したいと言ってきたときには、正直面食らったがね。何しろ、日本の文学に関しては、古典文学や純文学の研究は進んでいるものの、特定地域の民間伝承の研究など前例がなかったから。だから君の研究がまずイギリスで注目され、君が教授になれたときは、私は本当に嬉しかった。だが今回の喜びはそれ以上だ。君の研究が日本の研究者、それも権威と言われる人たちから、見事に認められる形となったのだからね」

「ありがとうございます。クルズ先生のお陰ですよ」

フランクは微笑んだ。良い仕事をしたあとの充実感に満たされ、彼の面は輝いていた。

「いや、いや・・・」

老教授は相好を崩した。

「全て君の努力のお陰だ。しかし、私の弟子の中からこのような出色の研究者が出ようとはね。全く、これ以上に素晴らしいことはない。君を誇りに思うよ、フランク」

フランクは恐縮しつつ、頭を下げた。同席している妻マリアンも、老教授の言葉に誇らしげである。と、その時、この学会の主催者で

あるコウサカ教授が、畳の上を滑るようにしてやってきた。

「君、オーウェン君」

「これは、コウサカ教授・・・」

フランクは畏まり、一礼した。マリアンもそれに倣った。

「君の発表は、全く白眉であったよ。イギリス人の君がここまで彩都の伝承の研究に没頭し、しかもパイオニアとなってくれるとはね。正直、感動すら覚えたなあ」

「ありがとうございます。しかし、こちらからご挨拶にお伺いすべきところを、わざわざお越し頂くとは・・・」

「いや、いや。気にしなくて結構」

コウサカ教授は鷹揚に笑った。皺深い口元を大きく開けて笑うさまから、磊落な性質が見てとれた。彼はフランクの手を取り、猪口を握らせると、徳利から清水のような酒を注いだ。

「オーウェン君。この歳で君のように優秀な若い研究者に巡り合えて、これほど嬉しいことはないよ。さ、飲みたまえ」

「恐れ入ります。では一杯・・・」

尚も畏まるフランクを見て、クルズ教授も笑った。

「コウサカ君、今日は妙に気前がいいね。・・・しかしこの酒、なかなか旨いじゃないか。なんという酒かね」

「・・・それが、無類の酒好きの私も知らんのだよ」

コウサカ教授は肩を竦めた。

「でもまあ、名前なんかどうでもいいじゃないか。酒なんて飲んでしまえば、皆旨い酒だよ」

コウサカ教授は手を振って言った。だがフランクは、一口その清酒を味わった途端、確かにそれがクルズ教授の言うとおり、これまでに味わった日本のどの酒とも違っていているのを感じた。水のように清らかでさっぱりとしているが、梨花にも似たその芳醇な香りは極めて濃厚である。喉越しは清涼であるが、ひとたび喉を通れば体中が心地よく熱を帯び、更に求めずにはいられないような酒であった。「しかしこの酒は、どんどん飲めそうだね。できればロンドンに

持ち帰りたいが」

徳利を眺め回すクルズ教授に、フランクは答えた。

「ひよつとしたら、私の助手のミツヒコが銘を知っているかもしれません。あ、丁度良かった。ミツヒコ、ちよつとこちらへ」

ミツヒコはすぐにやってきた。

「どうしました、先生」

「ミツヒコ、君はこの酒の銘柄を知らないかね」

その言葉を聞いて、ミツヒコの目が一瞬、悪戯っぽく輝いた。彼は微笑み、勿体ぶった調子で言った。

「珍しい酒ですよ、これは。狐来酒というんです」

「コライシュ？聞いたことがないな」

訝しがるコウサカ教授に、ミツヒコは頷いてみせた。

「そうです、狐来酒です。狐が来る酒、と書きます。これを飲めば狐が来るとも、これは狐が造った酒だとも言われているのです」

「確かに、狐が来ても不思議はないなあ」

クルズ教授は頷いた。

「東洋では、狐が人を化かすこともあるという。さっぱりしているからといって大量に飲んでしまえば、悪酔いして本当に化かされるかもしれない。美人に化けていてくれれば、それはそれで構わんが」

「ははは！ただの言い伝えですよ」

ミツヒコは笑った。コウサカ教授は上機嫌で、杯を高く掲げて言った。

「さあ、今宵は良い酒だ。や、君、オーウェン君の奥さんかね。お名前は？マリアンさんか。さあ、あなたもお飲みなさい。君はオーウェン君の助手だそうだな。ミツヒコ君と言ったつけ。未成年だろうが構わん、私が許す。さ、君も飲みたまえ。・・・だがオーウェン君、君は飲みすぎるな。明日も大事な発表が待っているはずだ。くれぐれも、気を抜くなよ」

部屋へ戻ったフランクは、畳の上に敷かれた布団に入り、寝返りばかり打っていた。少し開いた障子の隙間を通して吹き抜ける彩都の秋風は肌に心地よく、いつもの彼であればよく眠れそうな夜であった。ふと傍らの妻を見ると、彼女は軽い寝息を立ててぐっすり眠り込んでいる。大切な発表を明日に控えての高揚感からか、はたまた、先頃飲んだ美酒のせいなのか。フランクは独り眠れぬ夜を持て余し、もっと夜風に当たろうと、障子の傍へと近づいた。

「……どうも寝付きが悪い。それほど飲みすぎなかったと思うがな」

彼は独りごち、首を傾げた。寝静まった彩都の町並みの黒い屋根瓦が、奇妙なほどに輝く青白い満月の下に照らされ、鈍い光を放っていた。

「先生、先生」

突如フランクの耳に、ごく小さな、しかしはっきりと自分を呼ぶ声が聞こえた。彼は訝しみ、扉のほうを振り返った。

「先生、僕です」

「……なんだ、ミツヒコか」

フランクは扉を開けた。

「先生、眠れないのですね。僕もなんです」

ミツヒコは手にした行灯の火を掲げると、フランクを見つめ、低い声で言った。その切れ長の黒い瞳は潤み、小さな紅い唇は濡れたように艶めき、常日頃の屈託の無い少年とはまるで別人のように、ミツヒコはなまめいて見えた。戸惑い、思わず視線を逸らしたフランクの様子を目の当たりにし、彼はくすりと笑った。

「先生、眠れないのなら、僕と一緒に行きましょう」

フランクは訝しみ、目を側めたが、一方ミツヒコの目は、異様なまでに輝いていた。

「……行くって、こんな夜中にどこへ？」

「それは、先生と僕だけの秘密です」

ミツヒコはそう言うと、滑るように部屋の中へ入り込み、フランクの手を取った。彼は奥の壁に掛かった山水画の前で足を止めると、突然フランクに抱きついた。彼は背伸びをし、フランクの耳元に唇を寄せて囁いた。

「先生、僕をしつかり抱きしめていて。これからいい所へ連れて行ってあげるから」

フランクは訳の分からぬまま、半ば思考の麻痺した頭で、ミツヒコに従った。

3 .

そそり立つ岩山。そこから流れる滝。岩山の麓に広がる、澄んだ水を湛えた泉。そのほとりにある彩都風の四阿の中にいた、若者らしい人影。その影の主は立ち上がり、フランクのほうを振り返った。その若者の美しさに、フランクははっと息を呑み、その場にくずおれた。彩都の磁器のように白く滑らかな肌に、高い額、きりりと弧を描く細い眉、黒曜石のように輝く切れ長の瞳。すっきりとした鼻梁に、薄く形の良い、薄紅色の唇。水辺の柳のようにすらりとした、その優雅な立ち姿。彼は、驚嘆し、視線を逸らすことすらできないフランクを責めるでもなく、口元に優しい笑みを浮かべた。

— そうだ、私は確か、ミツヒコの案内でここへ来て……。しかし一体、ここはどこだろう？ この美しい人は、一体誰なのだろう……。

フランクはここへ来てから抱き続けてきた問いを、口にしようとした。だが今日の前にいる若者の輝くばかりの美しさを前に、彼の口の中はからからに乾き、舌は喉に貼り付き、言葉は意味を失った。彼は今まで、どのような男たちの中にも、いや女たちの中にすら、このような美しさを見出したことはない。この若者を目の前にしていると、彼はたった今まで必死で知ろうとしてきたこと、即ち自分は一体どうした経緯でこの光景に身を置いているのかということな

ど、くだらないことのように思えた。それどころか、この風光明媚な場所が一体どこなのか、この若者が一体何者なのかさえ、最早どうでもよいように思われた。

暫く呆けたように若者の面を見つめていたフランクであったが、彼は突如、ひりつくような喉の渴きを覚え、顔を歪めた。その彼の心の内を察したように、若者は目の前の泉に近づくと、自らの手をそこに浸し、清らかな水を掬った。彼はゆっくりとフランクに近づくと、物言いたげな唇を半ば開き、水を差し出した。フランクは若者の手から、それを貪るように飲んだ。だが次の瞬間、彼は驚いて泉を見た。

―これは、水ではない。酒だ。しかも狐来酒だ。

一体どうして、そしてどのようにしてここへ来たのか、ここが何処なのか、肝心なことは何も思い出せぬのに、どういうわけかフランクは、狐来酒のことだけは鮮明に思い出した。水のように清らかな、それでいて異国の花のように濃厚な香りを持つ酒。若者は再び、泉に手を浸して酒を掬った。フランクはゆっくりとそれを飲み干すと、白い花のような若者の掌に、自らの唇を押し当てた。若者は眉を寄せ、目を閉じ、白い喉を反らせた。彼はフランクからその手を離すと、フランクを見つめながら、ゆっくりと衣を解いた。象牙の像のように繊細な、彼の肢体が露となった。彼は横目でフランクを見遣りつつ、酒の泉に入っていた。

眼前の岩山の頂から流れ出る水が滝となって泉に合流し、飛沫の中に小さな虹を成している。その虹を透かして、若者の白い肌が見えた。虹の向こう側から招くような視線をフランクに投げかける彼の姿勢はひどくなまめいていて、フランクはこれまでに感じたことがないほどの情欲が、酒が齎す熱と同時に体の内から湧き上がるのを感じた。

若者は、フランクに手招きをした。フランクはそれまで纏っていた、学者然としたスーツを脱ぎ捨て、狐来酒の泉に身を浸した。若者は彼に近づき、突如、その首の周りに滑らかな腕を回した。思わ

ず目を閉じたフランクの唇に、彼の甘い吐息を含んだ唇が感ぜられた。フランクは腕を広げ、この美しい若者を抱きしめた。二人の皮膚は熱く溶け合い、恍惚のうちに彼らは互いを貪り求めた。

その夜から毎晩、マリアンが眠りに就いた頃、決まってミツヒコはフランクの部屋を訪れるようになった。その都度彼は、フランクの首にほっそりとした腕を回し、その耳元に囁くのであった。

「先生、今夜も行くでしょう？秘密のいいところへ」
すると、どのようにしてだかはわからないが、フランクは気付くと、あの桃源郷のような光景の中にいる。そしてそこには、あの美しい若者がいて、決まって彼を迎えるのであった。

夜毎の情事に、フランクは我を忘れた。昼間何をしていても、誰と話していても、あの若者の艶やかなぬばたまの髪、潤んで輝く黒い宝石のような瞳、もの言いたげな唇、滑らかな腕、悩ましい姿態が、彼の目の前をちらつく。彼はそのイメージに取り憑かれ、殆ど息もできないように思えることすら度々あった。これまで大切にしてきた研究も、恩師も、そしてあれほど愛しく思った妻さえ、彼にはどうでもよく思われた。

美しい若者の幻影に憑かれた彼は、最早寝食すら忘れた。空腹を感じることもなく、眠気を催すこともない。ただ彼は、夜毎にあの若者の手から飲む狐来酒さえあれば、他のものは何も必要なかったのだ。

たった数日でみるみるやつれ、人が変わったようになった夫を、マリアンは案じた。だが何がどうしてそのようになってしまったのか皆目わからず、彼女はただ途方に暮れるばかりであった。

4 .

「フランク、一体君はどうしたのかね」

五日目の発表が終わったあと、クルズ教授はそう言いながら、フランクの元へ駆け寄ってきた。

「君、今日の君は、全く精彩を欠いたぞ。・・・いや、今日だけじゃない。君は日に日に悪くなっている。初日の発表は良かった。素晴らしいかったと言っているよ。だが、二日目、三日目と、どんどん悪くなる。優秀な君が、質問をされてもまるで上の空じゃないか。一体全体、どうしたというのだ」

「すみません、クルズ先生」

フランクは恩師と目を合わそうともせず、ぞんざいに答えた。そこへ、コウサカ教授もやってきた。

「クルズ君、君も心配でやって来たのかな。オーウェン君、君の様子が初日とはまるで別人のようだから、ちょっと気になってね。何か、悩み事でもあるのかい。それとも、体の具合でも悪いのかな」
コウサカ教授はそう言うのと、皺くちやの手をフランクの額に当てた。

「熱があるようだ。それに、顔色もひどく悪いな」

「言われてみれば・・・」

クルズ教授も頷いた。

「かなり顔色が悪い。殆ど土気色だ。君、ちゃんと食事はしているかね。それに眠れているのかな」

「大丈夫です、クルズ先生」

フランクは力なく微笑み、そそくさとその場を去ろうとした。だが次の瞬間、彼は足を纏れさせ、その場に倒れ込んでしまった。

「おい、フランク、フランク！しっかりしたまえ」

クルズ教授は思わずフランクを助け起こしたが、彼は落ち窪んだ目を半ば閉じ、ただ唇を僅かに動かすのみであった。そうこうするうち、一体何事かと、他の研究者たちが集まってきた。

「とにかく、我々で部屋へ運ぼう。そのあと医者と呼ぶんだ」

コウサカ教授とクルズ教授は頷き合った。二人はだらりと垂れたフランクの両腕をそれぞれの肩に回し、彼を抱え上げると、半ばよ

ろめくように宿屋にある彼の部屋へと向かった。

「マリアン君！マリアン君！中にいるかね」

「はい、只今」

部屋の扉を開けたマリアンは、二人の老教授に担ぎ込まれた夫の姿を見て啞然とした。その面は青ざめ、すっかり生気を失っている。

「あの・・・、一体、うちの人に何が・・・」

「どうということだね、マリアン君？君という人がついていながら、いったいどうしてこんなことに」

詰問するクルズ教授に、マリアンは涙目になりながら答えた。

「うちの人・・・、ここへ来た翌日から、様子がずつとおかしかったんです。話しかけても上の空だし、どんなに言っても食事を全く摂らなくなつて。それどころか、話しかけようとすると、私を払いのけるようになったんです。何を言おうとしても聞いてすらくれないから、どうにもしようがなかったんです」

クルズ教授は、額に手を当てて考え込んだ。

「・・・それはおかしいな、あんなに仲睦まじかった君たちが。それに幾度も禅都を訪れているフランクが、今更水が合わないなんてこともあるまいし。・・・何か悪いものでも食べたかな」

「・・・そんなこと言ってる場合じゃないだろう。とにかく、すぐ医者だ」

コウサカ教授が急いたように叫んだ。

「医者ならきつと、ミツヒコが知っています。とにかく彼に、医者と呼ばせましょう」

マリアンは答えた。クルズ教授も頷いた。

「とにかく、早くミツヒコ君を探そう。事態は一刻を争うぞ」

誰もいなくなつた部屋の畳の上で、フランクは目を覚ました。昼間というのに、辺りは何故かしんと静まり返っていた。

「マリアン、マリアン。いないのか？」

静寂に不安を覚えた彼は、思わず妻の名を呼んだ。だが返事はない。

—そうだ、私は発表の後に廊下で倒れて……。

はつきりしない頭を振りつつ、彼はふと目を上げた。とその時、彼ははっとして息を呑んだ。目を上げた彼の視線の先には、山水画があった。ここへ到着して間もなく、マリアンが気味が悪いと言ったあの山水画である。その山水画に描かれた風景は、彼が夜毎訪れる桃源郷のそれと、寸分違わず同じであったのだ。聳える岩山、そこから滝となつて流れる清水、そして泉。水辺には四阿が立ち、その中に、書生風の唐衣を纏った人影が見える。そうだ、これは夜毎見るあの光景、見紛うはずもなかった。

フランクは重い体を起こし、漸くのことで立ち上がると、よろめきながら山水画のほうへ近づいた。そして彼は、そつと四阿の中の人影に手を触れた。その瞬間、後ろを向いていたその人影が、ゆつくりとこちらを向いた。その面は、彼を夜毎慰める、あの若者のそれであった。

「そうか……、君だったのだね」

フランクは呟くと、恍惚のうちに微笑んだ。絵の中の若者は、彼に微笑を返した。と思うと、彼の姿はどんどん大きくなっていき、やがて絵を抜け出て、フランクの前にすつくと姿を現した。

「行きましょう、私の国へ」

若者は言った。フランクの青白い面に、喜悅の色が広がった。彼は腕を伸ばし、若者を抱きしめた。彼が再び我に帰ると、もうそこは山水画の中であった。

マリアンとクルズ教授、そしてコウサカ教授が、ミツヒコと医者を伴って部屋へ戻ってくると、肝心のフランクの姿は煙のようにか

き消えていた。皆は驚き、訝しんだ。

「一体、うちの人はどこへ言ったのかしら。とても歩けるような状態じゃなかったと思うけど」

おろおろと不安げに辺りを見回すマリアンに、コウサカ教授は言った。

「そう遠くへは行くまい。皆で手分けして探そう」

皆は頷き、部屋の外へ出ようとした。だがその時、ミツヒコは部屋の中に、何か只ならぬ気配が残っているのを感じた。敢えて言えば、妖気とでもいうのだろうか。それを感じ取った彼は、つと壁に掛かった山水画に目を遣った。

「あッ・・・」

彼は思わず声を上げると、山水画に駆け寄った。よくよく見ると四阿にいたはずの人影が忽然と消えている。彼は山水画を壁から外して手に取り、さらにそれを眺め回した。人影は、どこにも見当たらなかった。

「ミツヒコ君、何をしている。こんなときに・・・」

苛立ったクルズ教授は、声を荒らげた。

「こんなとき、絵なんかみている場合じゃ・・・」

「早く、この絵を燃やさなければ！」

ミツヒコは叫ぶと、山水画を壁から外し、傍にあつた蠟燭に火をつける。炎の中に絵をくべた。

「ミツヒコ、一体何を・・・」

「しッ、奥様は黙って！」

ミツヒコはマリアンを遮り、低い声で言葉を続けた。

「信じられないでしょうけど、先生はきつとこの中にいます。僕にはわかるんだ。だから、絵を燃やさなければ」

山水画はみるみる、青白い炎に包まれていく。ミツヒコはそれを、ただ黙って見下ろしていた。

フランクと美しい若者は、あの酒の泉の中で、互いの肌を求め合っていた。睦言の最中に、若者は囁いた。

「ずっと、ここにいらして下さい。私と共に、ずっとここに・・・」

フランクは若者の黒い瞳を見つめた。そこには、ただ彼一人のみが映っていた。彼は忘我の境地で若者を見つめたまま、ゆっくりと頷いた。その彼の唇を、若者は自らの形の良い唇で吸った。フランクは恍惚のうちに目を閉じ、肌を滑る若者の愛撫に身を任せた。

だがある瞬間、ふとフランクは目を開けた。若者が、突然彼から身を引き離れたからであつた。驚いたフランクが目にしたものは――青い炎に包まれ、美しい面を苦悶に歪ませる恋人の姿であつた。

彼はあらん限りの力で腕を伸ばし、若者を炎の中から救い出そうとしたが、炎はあつという間に若者を包み、その姿は掻き消えた。途方に暮れたフランクが辺りを見回すと、岩山も、滝も、泉も、全てがごうごうと青く燃えている。どこにも逃げ場はない――そう思った瞬間、彼は気を失い、その場に倒れ込んだ。

「ミツヒコ君、もしフランクがこの絵の中にいるのなら、これを燃やせば彼は・・・」

「先生は大丈夫です、クルズ教授。それより今は静かに見ていて下さい」

半ば怒鳴るように、ミツヒコは言った。彼の切れ長の黒い瞳が、きりきりと吊り上がった。その形相は常日頃見慣れた少年の穏やかな表情とはまるで違い、どこかしら人間離れしているようにさえ見え、マリアンは鳥肌が立つのを感じた。

と、そのとき、山水画が完全に焼け落ちた。それと同時に、炎の中から巨大ともいえるほど大きな狐が一匹躍り出た。輝くばかりの白い体毛は所々焼け焦げ、傷ついた尾はなんと九本にも分かれてい

た。ミツヒコは獣のような素早さで身をくねらせると、片手で狐の尾の端を捉え、もう片方の手でその首根っこを掴んだ。

「ほら、これだ。九尾の狐だ。こいつが、僕の先生に取り憑いていたんだ」

「九尾の狐だと……。信じられん。何と面妖な……」

二人の老教授にマリアン、そしてその場に居合せた医者は、ただ目を白黒させるばかりであった。狐は凄まじい形相でミツヒコをねめつけ、唸るように言った。

「おまえ、よくも……」

ミツヒコはそれを聞くと、狐の体をぐつと床に押し付けた。そして片手でぐいと狐の耳を引っ張り上げると、そこへ口元を寄せ、誰にも聞こえぬほどの低い声で言った。

「だって、兄さんがいけないんだよ。彼を連れて来たのは僕なのに、あんなに夢中にさせるんだもの。それだけならまだしも、あれでは幾らなんでも、彼があんまり可哀想だ。まるで廃人同様じゃないか。だから、これまでは兄さんの言うことは何でも聞いてきたけど、今度ばかりはそうもいかないなあ。……それとも、夢中になったのは兄さんのほうだったの？」

狐は唸ると、ミツヒコの白い手に歯を突きたてようとした。だがそれより、彼が狐の喉元を締めるのが一瞬早かった。狐はぐつと呻き、やがて息絶えた。

「さあ、僕は先生を探しに行かなくちゃ」

ミツヒコは、ぐつたりと力の抜けた狐の死骸、そして呆気に取られる皆を残し、部屋を出て行った。

「先生、気が付かれましたね」

目の覚めたフランクは、臥したままミツヒコのほうを見た。彼はゆっくりと、辺りを見回した。畳の上に敷かれた布団、障子、行灯。

ここは、宿にある彼の部屋だった。

―宿の部屋だ・・・。

フランクは酷く混乱したまま、頭を振った。彼の額から滑り落ちた手拭を取り上げ、それを傍らの洗面器の水に浸しながら、ミツヒコは言葉を続けた。

「先生は、狐を祀る古いお宮の横に倒れていらしたんですよ。もう誰も彼も忘れてしまった、古い古いお宮のね。先生をここまで運んで来たのは、この僕なんです」

「お宮に・・・」

「そう、お宮です」

ミツヒコは淡々と答えた。何故そんな所に自分が倒れていたのか、そのような問いすら浮かばぬほど、フランクには何か全てが曖昧模糊として感じられた。

―夢でも見ていたのだろうか・・・。

フランクは、ぼんやりとあの山水画のあったほうを見遣った。そこにはもう、何もなかった。

―やはり、夢だったのか・・・。

「ミツヒコ、マリアンは？」

訊ねるフランクに、ミツヒコは答えた。

「奥様でしたら、今しがたまでここにいらっしゃったんですが、先生の枕の氷を取りに行かれましたよ。・・・それより先生、気付けにこれを飲まれては」

ミツヒコはそう言うのと、懷から小さな瓢箪を取り出した。彼は卓の上の杯に中身を注ぐと、それをフランクに勧めた。

「これは薬にもなるんです」

フランクは頷き、起き上がって杯を干した。

―酒だ。狐来酒だ。

そう思った瞬間、彼の脳裏に、あの美しい若者の姿が過ぎった。切れ長の瞳、婀娜な立ち姿、そして最期に見せた苦悶の表情―。

「先生、兄さんのことを考えているね」

突然、ミツヒコが言った。ぎよつとしたフランクが彼の面を見つめると、彼は笑みを浮かべた。悪戯っぽい、どこかなめいたような、彼独特の笑みだ。彼はフランクの顔に自らの面を寄せると、その唇に自らのそれを重ねた。弾かれたように飛び退るフランクに身を摺り寄せ、その腕に自らの細い腕を絡めながら、ミツヒコは囁いた。

「そんなに吃驚しなくてもいいでしょう、先生。僕は先生のこと、可愛くて仕方がないんだから。・・・それより先生、僕、先生を兄さんの所へ連れて行ったこと、今では後悔してるんです。申し訳ないことをしてしまったなって。だけど、先生を助けたのも僕なんだから、帳消しってことでいいですよ」

「やはり、あれは夢ではなかった！では、あの若者は一体・・・。ミツヒコは・・・。」

フランクの背を、ぞつと怖気が走った。そんな彼の様子には構わず、ミツヒコは更にフランクに身を寄せた。

「安心して、先生。僕は大好きな先生に、兄さんがしたようなこととはしないよ。これから体が完全に良くなるまで、僕がつきつきりで見っていてあげるから。それに先生が良くなったら、これまで通り研究も手伝ってあげる。先生が成功できるように、いろいろ計らってあげることできるよ。だから、ねえ先生、今度は僕を可愛がって」

(了)

この作品は、ブログ”Titania's Little Cabinet” にも公開中です。

（後書き）

お読み頂いてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3940ba/>

妖酒の怪

2012年1月10日10時14分発行